

やはり俺が秀知院に入るのは間違っている。

大学生のMZ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

秀知院学園からの誘いにより体験入学することになった奉仕部。

天才たちの恋愛頭脳戦に新たな戦が加わるか。

新たな恋ははじまるのか。

俺ガイル×かぐや様は告らせたいの青春ラブコメデュー

目次

秀知院への体験入学？	1
比企谷八幡は伝えたい	6
由比ヶ浜結衣は出かけた	10

秀知院への体験入学？

八幡視点で描かれています。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

「はあ、他学校への体験入学ですか？」

平塚先生が突然言い出した内容に、比企谷八幡は思わず疑問を呈す。

「そうだ。と言ってもこちらから志願したわけではなく、相手方からの誘いだ。普通の相手ならばこちらとしても断ろうと考えたが、何せ相手が大物だったのでな。なかなか得られない体験だと考え、引き受けたというわけだよ。」

「して、その相手方というのは？」

雪ノ下雪乃は質問する。当然だろう、相手が大物と言われ、気にならない人はいないだろう。

「ああ、相手は“秀知院学園”だ。」

それを聞いて雪ノ下は驚きを顔に表す。一方、比企ヶ谷と由比ヶ浜は疑問符を浮かべている。

「ゆきのん、知ってるの？」

由比ヶ浜がきくと、雪ノ下が答える。

「ええ、昔は貴族たちが通っていたという学校よ。今でもその名残で各界のトップの子息たちが通っているとか。」

驚いた。まさかそんな学校がまだ存在しているとは。

「そんな学校からなぜそんなお誘いが？そもそもなんで俺たちなんですか？」

「うむ、雪ノ下の説明した通り、あそこは将来のトップたちが通う学校でな。その分、一般人の価値観と少々一致しない部分がある。そこで、悩んだ学校側が、生徒たちに一般人の価値観を身をもって考えさせるために一般高を探していたらしい。向こうの校長がテキストに選んだ結果、総武がたまたま選ばれ、お誘いがきたというわけだ。そして、なぜ君たちを選んだかだが…」

平塚先生はニヤリと笑い、俺たちに言った。

「君たちを行かせるのが一番面白そうだからだ。」

「おい、そんな理由かよ。」

思わずツツコんでしまった。というか、相手の校長もテキストに選ぶとか大丈夫か？気まぐれで頼みごととしてきそうで怖いんだが。

そう考えていると

「平塚先生、そんな理由では他の教員たちが納得しないのでは？」

雪ノ下は呆れ顔で正論を投げかけた。しかし平塚先生は、分かっている、という顔だ。

「なにも他の先生にまで、面白そうだからあの子たちを選んだ、と伝えるわけではないよ。雪ノ下は県議会議員の娘、由比ヶ浜はコミュニケーションに優れている、比企ヶ谷は観察眼がある。これらの理由も含めて、君たちを選んだと、他の先生にはそう説明するさ。」

たしかに、県議会委員の娘は一般的には上流と言われる出身だろう。各界のトップたちと話も合わせやすいだろうし、相手からも馴染みやすい。由比ヶ浜もコミュニケーション能力は高いので、体験入学させることで相手とより円滑に会話ができるだろうし、納得できる、けれども…

「俺はそんなに評価されるものを持っていないと思いますが。」

他の2人に比べて、並べるような力があるとは思えなかった。それこそ葉山隼人のような完璧超人を送った方がいいんじゃないか？と思った。

しかし、

「いいや、君のことは評価しているとも。少なくともここにいる者たちはな。それに、変わった人物を1人くらい送った方が、何か化学反応が起ころのではないかと思っているよ。」

平塚先生は優しい瞳を向けながらそう言った。

隣では雪ノ下は「その化学反応で毒ガスがでなければいいのだけれど…」なんて言っているし、由比ヶ浜は「べっ、べっ」にヒツキーのことなんて、その、、評価なんか…（／＼）と不満をこぼしているのを見ると心配になるのだが。

まあこいつらだけ行かせるのもあれだしな。

「わかりましたよ。行けばいいんでしょう。」

「うむ、では頼んだぞ、君たち。場所は東京なので相手方が寮を用意してくださいさるそうだ。他に気になることは向こうに行ってから聞きたまえ。私からは以上だ。頑張ってきたまえ。」

そういうと平塚先生は教室を後にした。

こうして、新たな地で俺の青春ラブコメが始まった。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

「これ、本当に学校なのかよ。」

体験入学先に着いて、開口一番の言葉である。

雪ノ下も由比ヶ浜もそれぞれ驚いているようだ。

「ハハ、れっきとした学校デスヨ。たしかに少し大きいデスガネ。」

そう説明してくれるのは、秀知院の校長である Adolph P
escarolo。

この人がテキトーに高校を選んだ人か。

そんなことを思いながら、校長から体験入学についての注意事項や寮での生活、教室の場所についてなどを聞き、他に困ったことがあったら生徒会に聞くといいと伝えられた。

各々のクラスで自己紹介も済ませ、放課後になる。一応、世話になるかもしれない生徒会に挨拶をした方がいいだろう。その旨を雪ノ下たちに伝えると、彼女らも了承する。

「失礼します。」

中に入ると、目つきの悪い男が1人、上品な女が1人とポワポワとした雰囲気醸し出す女が1人いた。まあ目つきに関しちやこつちは悪いどころか腐ってるけど。

「ああ、君たちが体験入学者か。はじめまして。おれは生徒会長の白

銀御幸だ。で、こつちにいるのが四宮かぐや、そつちの椅子に座っているのが藤原千花だ。よろしくな。」

白銀は四宮と藤原の紹介もしながら気さくに挨拶してきた。

「はじめまして、総武高校から来ました、雪ノ下雪乃です。こちらこそよろしくお願いします。」

雪ノ下が上品に挨拶をすると、続いて由比ヶ浜と八幡も挨拶をした。

「そうかしこまらないでくれ。来たばかりでわからないことも多いだろう。おれも一般入試で入った身だからな。気持ちわかる。何かあれば遠慮なく生徒会室を訪ねてくれ。力になろう。」

「わかったわ。ありがとう。」

それからは、お互いに趣味なんかや好きな教科、休日はなにをしているかなんて、たわいのないことを話した。趣味で人間観察といったときの全員の目がヒいていたのはちよつとシヨックだったが。

なんだよ、人間観察立派な趣味だろ。

「そういえば、あなたたちは何か部活動を？」

「私たちは奉仕部、という部活動をしているわ。活動としては生徒の悩みを聞いて、解決を促したり、学校の行事の手伝いをしていたわね。」

「変わった部活ですなー。」

「でしょー。でも楽しかったよー。ねー、ゆきのん♪」

由比ヶ浜は雪ノ下に抱きつく。雪ノ下も暑苦しそうにはしていたが、NOとは言わなかったため、由比ヶ浜は嬉しそうに腕に力を込めた。「ほう、生徒の悩みを聞いて解決するとは感心だな。よかったら放課後生徒会室に来ないか？たまに生徒たちが悩み相談に来ることがあってな。もちろん、俺たちもアドバイスするが、一般的な意見かどうか怪しい時もあるからな。そういう意味でも君たちもアドバイスしてくれると助かるんだが。」

「そうね、一般的な価値観を生徒に知ってもらおうという目的もあることですし、構わないわ。2人も問題ないかしら？」

その質問に由比ヶ浜も俺もうなずく。どうせ放課後もすることな

いだろうしな。

「そうか、助かるよ。ではこれからよろしくな。雪ノ下、由比ヶ浜、比企谷」

そう言っつて、明日から生徒会室での奉仕部の活動の再開が決まったのであった。

はじめまして。

俺ガイルの八幡の活動は1年生のときという設定にします。でないと時系列めちやくちやになつてしまうので。設定としてはガバガバナのですが、八幡たちとかぐやたちのクロスオーバーにねじ込みたかっただけです。その辺はご容赦ください。

純粹に俺ガイルの人物がかぐや様の人物たちとどういう掛け合いをするのか、お楽しみいただければと思います。

比企谷八幡は伝えたい

良いニュースと悪いニュース、どっちから聞きたい？

良いニュースはフラれたことはないということ。

悪いニュースは付き合ったこともないということだ。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

柏木さんの彼氏回

放課後になり、生徒会室に向かう。そんな日が1週間経った頃だ。生徒会室に入ると、雪ノ下は四宮と、由比ヶ浜は藤原と話していた。雪ノ下は四宮の入れる紅茶がきっかけで、由比ヶ浜はシヨツピングの話がきっかけでお互い話すことが多くなったらしい。仲良きことはいいことダナー。

そんな俺も、白銀とは男同士ということでちよくちよく話す。

そんな時、生徒会室の扉が開けられた。

「失礼します。白銀会長に用があつて来たんですが…。」

現れたのは地味めの男子だった。何やら女子の方をチラチラ気にしているようで

「俺らは席を外した方がいいか？」

そう聞くと、その生徒は一瞬驚き、その後首を縦に振った。

じゃあ、少し外しましょうか。四宮がそう言つて皆部屋からであるが、何故か俺も引き止められたので、部屋には白銀と俺が残ることになった。

「さて、なんのようだろうか？」

「はい、実はぼく、会長に恋愛相談をしたくて。会長は恋愛において百戦錬磨だとか！ぜひ、うまくいく告白の仕方を教えてください。」

え、なに、こいつ恋愛マスターなの？白銀に懐疑的な目をむけながら、詳細についてきく。

どうやらこの男子は同じクラスの柏木さんという女子が好きらしい。まあ女子の方をチラチラ見ていたし、女子に聞かれたくない話と

なれば恋愛話は鉄板だろう。

「で、なんで俺まで残ってるの？あんな恋愛とか得意じゃないんだけど。」

なんなら人間関係全般、得意ではないのだが。

「比企ヶ谷くんは一瞬でぼくの意図を読み取りましたよね！その観察眼ならば、柏木さんがぼくのことをどう思ってるのかわかるんじゃないかと思ひまして。協力してもらえないですか？」

…なんだろう。このデジャブ感。まあこいつは名前間違えてないだけマシか。ただ、あんなことになるのはもうごめん。だから

「俺が告白するかじゃなければいいぞ。」

「いやそれ協力どころか、思いつきり略奪してますよね!？」

予防線のつもりが、盛大にツッコまれてしまった。

「まあ出来る限りのことは協力しよう。比企ヶ谷も、頼まれてはくれないか?。」

「いいけど、俺そんなに力にならないと思うぞ。」

「大丈夫だ。意見を出してくれる人がいるだけでも大分違うだろう。」

「わかった。やれることはやろう。」

「ありがとうございます。白銀会長、比企ヶ谷くん。」

「で、その件の女子とはどこまでの関係性なんだ？挨拶程度の仲なのか、友達なのか?。」

「友達くらい認識だと思ひます。教室で普通にしゃべりますし。」

（友達かあ。これはむしろ挨拶レベルよりも厄介かもしれないな。）

友達フォルダ！それは恋人になるのに非常に厄介なハードルである。恋人になるには男らしさを見せる必要があり、挨拶レベルならば相手が自分のことを知らないがゆえ、大胆な行動もとれるものであるが、友達フォルダに一旦入ってしまうと、なかなか突飛な行動はとりにくいもの。その結果、「いい人だけど、男としては見れないかな。」という最も言われたくない言葉を聞くことになってしまうのである！

「なるほどな。」

（白銀もこの恋は難しいと判断するか?）

「お前、イケるぞ。」

(えええー!!!マジかこいつ!ほんとに恋愛マスターか?ギャルゲーやってるやつの方がもうちよつとマシだぞ!)

「白銀、理由は、?」

しどろもどろになりながら白銀に理由を尋ねる。

「なに、簡単なことだ。友達レベルの付き合いならば、出かけることに對しての心理的ハードルも低い。そこで男らしさを見せれば、惹かれること間違いなしということだ。」

「たしかにデートの心理的ハードルは低いかもしれんが、急に男らしさを見せるってなかなかリスキーだぞ。」

「たしかにな。そこで、必殺技を授ける。これをすれば女子はメロメロだとも。」

「会長、いったいどんな技なんですか?」

「いいか、まずは相手を壁側にする。そこで片手を相手の頭の横に押し付ける。相手はいきなりで不安になるだろう。そこで反対側の耳にこう囁く。俺と付き合え、と。このギャップでやられん女子はいない。俺はこれを壁ダアンと名付けた!」

(それ壁ドンじゃねえか。)

「し、しろが「会長天才ですか!」…え?」

「僕、感動しました。早速今からデートに誘ってみます!ありがとうございます。ありがとうございました。」

そういうと、その男子はでていってしまった。

「あれ、大丈夫か?結局おれ、なにもしてないけど。」

「大丈夫に決まっているだろう。なにせ壁ダアンを授けたんだから。」
「どんだけ壁ドンの力信じてるんだよおまえ。おれ心配だし見てくるわ。」

そう言つて、彼の後を追う。

ちょうど教室に着くと、彼がデートを申し込んでいた。柏木という女子は「え、別に、いいけど。」とすこし戸惑っているように見えた。これはよろしくないかと思つたが、おれはその後の彼女の表情を見て、意外と白銀のいうことも間違っていないと気づいた。彼からの突

然のデートの誘いに、彼女の顔がすこし赤みを帯びているのに気付いたから。

だからおれも依頼をこなそう。

男子に近づいて、「意外と脈なしでもなさそうだぞ。まあ、がんばれよ。」と小声で伝える。

後日、その男子は生徒会室に来て、付き合えたことを報告しに来たのだった。

由比ヶ浜結衣は出かけた。

ショッピング

それは女子高生の定番の行動である。友達と一緒に服を見たり、ご飯を食べたり、映画を見たり、時にはインスタ映えだけのためにどこかに行くことも少なくない。しかし、定番の行動ということは大量の人が同じ行動をするということである。わざわざ人混みに入り、長い時間を並ぶのは理解できない。今時ネットがあるのだから、ネットショッピングしたり通販で買い物したりすればいいものを。気高きぼっちである俺は、わざわざ人混みにまぎれ、無駄な時間を過ごすことなんてしない。しないつたらしない。ぜつ、ぜつたいに、いかならんだからね！

★★★★★★

「せっかく東京きたんだし、買い物いこうよ、ほら、119?とか!」
奉仕部のムードメーカー、由比ヶ浜結衣は何やら突然買い物に誘い出した。

「それをいうなら109だろ。誰を病院送りにするつもりだ。」
「あなたは病院に行ったほうがいいんじゃないかしら?主に眼科と精神病院に。」

「おい、おれの目はこうみえて正常だし、病んでもいない。おれの世界が理解されないだけだ。」

「それはそれで問題だと思っただけだ。」

「うるせ。てか、買い物なんてネットでいいだろ。わざわざ人混みに行く意味がわからん。」

「えー、そんなこと言わずにさー。」

「しようがないわよ、由比ヶ浜さん。彼は友達との買い物なんてしたことがないから振る舞い方がわからないのよ。察してあげましょうね?」

「ひ、ヒッキーごめんね?」

「おい、そんな悲しい理由じゃねえよ。あと謝んな。いや、謝らないでください。」

「まあ、冗談はさておき、たしかに買い物に行くのはいいわね。寮だからある程度のもは揃っているけど、小物なんかは買う必要がありそうだから。あなたも、わがまま言わないでついてきなさい。部長命令よ。」

「ひでえ職権乱用だな。まあ由比ヶ浜なんかは荷物多くなりそうなのが目に浮かぶし、荷物持ちくらいならしてやるよ。」

「やったー、ヒッキーありがと。みんなで買い物楽しみだな」

こいつら相手に、屁理屈こねても無駄だとわかってる。だったらさっさと済ませたほうが効率的だ。それに、本なんかは俺も見たいしな。

その後みんなで、主に雪ノ下と由比ヶ浜で日程を決め、今週の土曜日に買い物に行くこととなった。



当日、駅の改札口で待っていると由比ヶ浜と雪ノ下と一緒にやってきた。

「ヒッキーお待たせ。」

「おう、そんな待ってねえから大丈夫だ。行こうぜ。」

「そうね、まずは雑貨店でも回りましょうか。」

そう言ってみんなで買い物をする。途中由比ヶ浜が調理器具に興

味を持ち始めたので、俺と雪ノ下で慌てて止めたり、ペットコーナーで雪ノ下が動かなくなつた時には困つたりしたが。

そんなことをしてたらいい時間になり、みんなで昼食をとることになった。

「ちよつとトイレ行ってくるから先にフードコート行つといてくれ。」
そういつて俺は2人と別行動をとる。買いたい本があつたんだが、さすがに女子2人の前で買えるような表紙ではなかつたため、この機会に買おうと踏んでいたので。そうして、目的地にたどり着く直前、なにやら少女が男2人に絡まれている状況を見かけた。

「お嬢ちゃん1人？一緒にでかけない？」

「いえ、友達を待っているので、大丈夫です。」

「じゃあその友達も一緒にいいからさー。」

「いえ、遠慮しておきます。」

なにやら品を感じさせる口調で男たちの誘いを断る。まるで眼中にないような態度に、男たちはイラつく。

「おまえ、帰り道気をつけとけよ？」

少女の顔が一気に強張る。当然だ、帰り道に襲われたらひとたまりもない。どうにか対象を他に移さなくてはならない。だが、1人である少女にそれは不可能だった。少女はどうしようかと思案する。

「おい、おまえら今のセリフ録音したからな。ついでに顔写真も撮つたから。警察に通報されたくないや、大人しく帰つたほうがいいぞ。」

比企谷八幡はたまらず声をかける。さすがに録音はブラフだが、顔写真だけは撮っておいた。これで大人しくしてくれればいいのだが。そんな心配の中、相手は状況を理解し始め、自分たちの立場が危ういことに気づいた。

「す、すまんすまん。冗談だからさあ。だから通報とか勘弁してくれよ。」

「謝る相手が違うだろ。こっちの女の子にちゃんと謝るんだな。」

「ご、ごめんね。もう二度とちよつかいださないからさ。」

「…もう、いいですので。帰ってくださいですか？」

そういうと男たちは足早にその場から離れていく。あんなにビビ

るくらいなら初めからやるなって話だ。おっと、そんなことより。

「大丈夫だったか？よく冷静に対処できたな。たいしたもんだ。」

「いえ、こちらこそ助けていただきありがとうございます。1人じゃどうしようもできなかったのです。」

その少女は少し足が震えていた。当然だ、一時的とはいえ、犯罪に巻き込まれそうになったんだ。ここは友達が来るまで、すこし残ったほうがよさそうだな。

「友達はいつくるんだ？あ、すまん。盗み聞きしたみたいで、気持ち悪かったな。」

「いえ、気持ち悪いなんて思わないですよ。今はお手洗いに行っているのもうすぐ来るかと。」

そんなことを話していると、友達の女の子が来たようだ。遠くから少女に手を振りながら近づき、おれの姿を視認すると。

なんかすごい勢いで走ってきたんだが？

その友達は少女の手を掴むと、自分の身に引き寄せ、守るように体を被せながら、

「私の友達に手を出さないでください！通報しますよ！」

爆弾発言をかましてきたのだった。。。

「ツ
!!?!?!」

俺と少女は奇しくも同じ反応になってしまふ。

「違うんだ、話を「そんな、腐って目で私の友達を見て、言い逃れようなんて無理がありますよ！観念してください！」

やべえ、弁明させてくれねえ。このままだとおれ捕まっちゃうよ。小町たすけてえ〜。

「違うの！この人は私を助けてくれたんだよ！」

少女から俺がいる経緯を説明してもらい、なんとか通報は免れた。つぶね〜、ほんとに社会のゴミになるところだった…。

あと、この友達からはめっちゃ謝られた。

「ごめんなさい！ごめんなさい！」

「気にするな。なんなら知り合いにすら毎日腐った目って言われてるから。」

自嘲気味に笑い、友達の罪悪感を薄めようと試みる。すると

ピロン♪

『ピツキーおそいよ！私たちもう食べ終わっちゃうけど!?!』

…すっかり忘れてた。なにせ逮捕されるか否かの瀬戸際だったからな。

「わり、おれ連れが待ってるから、行くわ。2人とも気をつけてな。」

「あ、そうなんです。すみません、引き止めてしまったみたいで。助けていただき、本当にありがとうございます。」

「ああ、気にするな。…もし1人で帰ることになりそうなら送って行くから連絡してくれ。1人で帰れたらその連絡先は捨ててくれていい。」

そう言つて、紙に書いて連絡先を渡す。さすがにないとは思うが、万が一恨みを買って襲われたらまずいからな。

「新車のナンパですか？」

「ちげえって。」

いや、ほんとだよ？八幡うそつかないから。

「クスツ。冗談ですよ。最後まで心配してくれてありがとうございませす。」

「おう、じゃあ気をつけてな。」

女の子2人に手を振られながら去るとか、おれいまから戦場にでもいくのん？しかし、あいつらに何か埋め合わせを追求されそうだな。あとは雪ノ下の罵倒かあ。

そんなことを思いながら、俺はフードコートに駆け足でむかった。

(*このあとめちやくちや罵倒された。)

あ！てか本買ってねえじゃねえか！やっぱネットショッピングこそ至高だなと感じた日であった。

買い物編 比企谷の敗北。



「由比ヶ浜はめっちゃ買うから荷物重いし、逆に雪ノ下は全然買ってねえじゃねえか……。あいつがパンさんのぬいぐるみを食い入るように見てたのは知ってたんだぞ……。」

埋め合わせは東京限定のパンさんでいつか。

そんなことを思いながら、帰路につく。そういえばあの少女たちは無事帰れただろうか？ふと気になった時、ピロン♪

知らない相手から連絡がきた。

『友達の車に乗せてもらったので、無事に帰れました。今日はありがとうございました。』

どうやら今日の少女らしい。律儀な子だな。帰れたら連絡先は捨ててもいいと言ったのに。まあ無事に帰れたなら安心した。

『そうか、よかったよ。来週もできれば誰かと一緒にいた方がいいと思うぞ。できれば男手の方がいい。』

送信つと。

まあこれでこの子と関わることはないだろう。社交辞令のお礼だ。ここががつつくようなもんなら、おれの黒歴史が増える将来待ったなしだ。

そんなことを思っていたが、少女の返事を見ておれは驚いた。

『それなんですけど…ご迷惑でなければ、来週、私と一緒に帰ってくれませんか？』

「マジかよ。」

思いがけない返事に、俺は画面から目を離せなかった。

★★★★★★★★★★

少女サイド

友達との買い物も終え、家に着く。無事帰れたことに安堵する。どうやら無意識に警戒していたらしい。身体に疲労感が広がっていく。そんな疲労感の中、今日助けてくれた人のことを思い浮かべる。

（あの男の人、すごい頼もしかったなあ。年上っぽかったし、すごい優しくしてくれた。あの人がいなかったら、私どうなってたかわからない。今度、お礼したいな。）

…あ！そうだ！連絡先！無事に帰れましたって連絡しなきゃ。（携帯で連絡先を調べ、連絡をおくる。）

『そうか、よかったよ。来週もできれば誰かと一緒にいた方がいいと思うぞ。できれば男手の方がいい。』

（また心配してくれてる。やさしい。また会いたいな。）

…ダメもとで、一緒に帰れないか聞いてみよう…かな。けど、断られたら…。いや！これで誘わなかったら絶対会えないもん！だったら少ない可能性でも挑戦しよう！）

勇気を振り絞り、その少女、”白銀圭”は送信したのであった。

『それなんですけど…ご迷惑でなければ、来週、私と一緒に帰ってくれま』

せんか？』